

## 月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

### 7-5

シナリオのト書きモドキにすれば、酒場で相対する男女が険悪な状況下で、女が飲んでい  
た酒の中身をいきなり男の顔にぶっかけてしまうワンシーンにも似た行為を逆バージョン  
で演じてしまった横田は、台本に指示でもあるかのように、狼狽を露わにして真紀の次のセ  
リフを待っていた。

ウェイターの黒服と入れ違いに地味な私服姿のマネージャーが足早にやってくると、真  
紀の耳元に用件を告げた。

「よろしければTさんと同席していただけますか？」と真紀はおもむろに、ほぼ満席の店  
内で六人掛けの席を占拠している横田に同意を得ようとして尋ねた。

「Tさん？」と不意の申し出に横田は怪訝な面持ちで反復した。

「ヨ～、横田君じゃないか」とマネージャーの動向を探って目ざとく認めた大御所俳優のT  
は、これ幸いとばかりに声掛けすると有無を言わず真紀の隣に座った。

「お二人とも、こちらに」とTは言って、映画ファンに限らず誰もが知っている長身の二枚  
目中年男優と脱ぎっぷりの良さで評判の三十代のサラブレッド女優に着席を促した。

回り舞台での場面転換のごとき状況変化に動揺を隠せないでいる横田は、了承の意向を  
作り笑いで誤魔化すしかなかった。

「失礼いたします」と特徴ある声音で断ってから、隣にファーッと腰かけた女優の佇まいに  
気圧された横田は、上目づかいに真紀を見ながら腰を浮かせて「どうぞ……」とどことなく  
平坦な口ぶりで言った。

男優は無表情な顔で、185cm余りの姿態を折るようにして女優の隣に座った。

名立たる役者が三名いても、『こはる』の空気感はザワツクこともなく、いつも通りの表  
情を見せていた。

Tは二人の俳優は紹介するまでもないとばかりに、真紀と横田の生業を明かした。

「飲み物はコニャックでいいかな？」

Tの行きつけのイタリアンレストランで食事をしてきたので、食後酒には丁度いいと決  
めたTは二人の好みも聞かずに、ボトルキープしてある『マーテルコルドンブルー』を勧め  
た。

二人とも酒は好きだったので、飲みたいものはあったけれど、取りあえずブランデーも悪  
くはないと思い領いた。

注文を終えた大御所俳優は、気忙しい師走に一人きりで来店している画家に浮評も含め  
て嫌味のひとつでも言いたいのを抑えて、映画のことを話し始めた。